

祈り

目頭のわずかに一瞬の光輝である。明るい陽光がハアツと照らし出したフロアの一角に、ある老女の全身像が浮かび上がった。人生が深く刻まれた顔。左の指先で固く握りしめる白いハンカチ。その頬は天井の一点をうつめる……。

前巻から視線を泊まり込みで撮影に当たっていた私はみごこな「老いのシルエット」に心ひかれた。やわらかな頬の隅に「甲目の前の老女の姿が「祈り」にも似た雰囲気を色濃く帯びていたからだ。

同じまたたび、ほんたに三葉を失ったMさんは誠実で、身体全体で「道徳」をあらわす。一服に、陰気な老婦人病棟のイメージとは異なり、井野病院（兵庫県たつの市）の老人保健施設「しおさくらイブ」は「随分フロアにおおげさん、床屋、談話のソロン。昔懐かしい」町のたたずまい「がそっくり再現されている。また、居心地のいい各階の療養室間はそれぞれ「花」「鹿」「月」「暗」「雪」4階と呼ばれ、高齢者本人からのんびりと療養生活を過ごす。

その翌週で二期的な老人病院で様々な老いをレンス越しに見た。しかし、あの「祈り」の光輝が頭から離れなかった。

取材協力／吉原地区センター（ナリスト）

老人病院の一種である「老人保健施設」とは、病室になった病室が、病院から家庭に居るための中間的な医療施設だ。現在は国を主回に2000施設以上を数える。「人生たのび介護」月謝約4万円、24時間介護施設「万巴」といわれるが、来年4月の介護保険施設後、老人保健施設により介護サービス面で大きな差が生じることが懸念される。

写真のMさんは1911年生まれ。入院10ヶ月目の先月末、脳溢血になった。骨粗鬆症「骨が脆くなって折れやすくなる病気」を原因とする右大腿骨頭骨折。さらに脚硬直を併発し、寝たきりの状態である。「世帯をさせたが、いい妻です。元気なころは口数の少ない働き者だったんです」。

病む妻のベッド近くで、おなじ年の夫B氏はそう語ってくれた。彼自身も足が弱って、いまは「人寄せし、リハビリを兼ねて同じ病棟に泊院しているが、その夫が顔を

